

# 園長だより

ゴールデンウイークが終わり、保育園に元気な声が響きます。さて、子ども達も久しぶりの登園、休日の出来事をいろいろと話してくれました。子ども達の笑顔から充実した日々が実感できました。

ゴールデンウイークと言い、休日をひとくくりにして呼称していますが、祝日についての意味合いなど子ども達にわかる範囲で教えてあげたいものです。

## 「 児 童 憲 章 」

「児童憲章」あまり聞きなれないものです。実は5月5日こどもの日に子どもの権利に関する宣言「児童憲章」が制定されたことから制定記念日でもあるのです。1951年のことですから70年前近くにさかのぼります。

国民の祝日に関する法律では「子どもの人権を重んじ、子どもの幸福をはかるとともに母親に感謝する」ことが趣旨とされ、この日が端午の節句であることに因んでいるものです。

私が児童憲章を意識して知ったのは今から30年以上も前のこと、保育者の養成校在学時です。うろ覚えですが保育概論の授業で、先生の「5月5日は何の日か？」との問いに、ほぼすべての学生が「こどもの日」と偉そうに答えていたのが思い出されます。

先生は微笑みながら、「お前らは何も知らんのか」と言わんばかりに児童憲章について語り始めました。講義の終了時には「児童憲章全



文をテストに出すから、覚えておけ」と圧をかけられたことを思い出します。

皆さんには聞きなれない「児童憲章」、全文は紙面の関係で紹介できませんが一部、前文は以下です。

### 児童憲章

われらは、日本国憲法の精神にしたがい、児童に対する正しい概念を確立し、すべての児童の幸福をはかるために、この憲章を定める。

児童は、人として尊ばれる。

児童は、社会の一員として重んぜられる。

児童は、よい環境のなかで育てられる。

という書き出しからはじまるものです。

保育現場に出てからは全文を一語一句、噛みしめ、読む機会はなくなりました。

園長だよりで取り上げたのだから、この機会に保育からの視点を児童憲章にからませ考えてみます。



### 児童は人として尊ばれる。

この世に生まれ、生きていくため、小さいなりに生きていく力を獲得し養っていく、お腹がすけば泣き、眠たければ泣き、不快な場面でも泣く、今、できることを小さいながらにアクションを起こし盛んに知らせていく、大人は目の前にいる我が子、子ども達の姿をみて、



置かれている状況を見て、感じ、その行為をわかろうとする。

人として尊ばれる、人として尊重されることのはじまりです。

### ご飯を食べる

#### 食べることを嫌がることから・・・

保育園ではご飯(給食)を食べる時間はほぼ毎日、決められた時間にたべています。

年齢が低くなるほど、ひとり、ひとりの生活時間を大切に考えています。起床、朝ごはんの時間、食べた量、授乳の時間、睡眠時間など子ども達の情報はできるだけ早く頭に入れ、その日の生活の流れを微調整します。

こんなことが過去にありました。いつも決められた時間で食事をするとき「食べたくない」と訴える場面にてあいました。かたくなに口を開かないこともあります。「なぜ、どうしてなんだろう。生活の流れに問題はない・・・そろそろお腹が減るころだろう」

実はここにおおきな落とし穴があります。そもそも、お腹が減り、ご飯を食べたい、ミルクを飲みたいと要求をするのは子どもである。

年齢が大きくもなれば「腹減った」「そろそろご飯の時間かな」と訴える。上記の「食べない子ども」はお腹がすいていない。椅子に座らされ、お口を「あーん」と食べさせられることに抵抗を感じているにすぎないだろう。他にも要因があるかもしれない。食事の配慮には月並みですが、心地よく食べることが必須である。食べているときの子ども達の心情が

穏やかに、心地よく、自分の要求が満たされる、満足感がいただけるかにあるように思う。

集団生活の中でひとり、ひとりの状況に応じ、その子の気持ちに寄り添い、共感的に対応することの難しさもある。

がしかし、保育とは難しさの中からできうる限りの対応をしていく営みが大切です。

「そろそろ、お腹が減るころだろう」「決められた時間だから」「毎日のことだから」と大人の概念ではかられたものは、先のように「食べたくない」という子どもの訴えに出会う場面を生み出してしまう。

人として尊ばれる。児童憲章の一語をからませ考えてみると 保育の日常、いたるところに尊ぶ場面がある。

毎日の繰り返しの中にも子どもの内面を感じてあげることが大切です。

気づくことが感じることにつながる。

感じてあげることが子どもを

理解することにつながる

日々、そんなことを普通にごく自然にできるようにになれば目の前にいる子ども達を人として尊ぶことが自然体でできているはずである。気忙しい中でもゆとりを持つことの大切さを痛切に感じます。

自分に大きな課題を頂いたように思える

子ども、子ども達から学べである。

( 園長 廣部 信隆 17)